

歩行・重心と米食

飯 沢 匡*

Walking, Equilibrium and Rice Eating

Tadasu IIZAWA*

私は芝居の演出家でもあるから、舞台上の交通整理は専門家である。よく芝居の方で、初心者の悪口をいう時「あの男は舞台もろくろく歩けない」と軽蔑するが、正にこの通りなのである。あれだけの、せいぜい何メートルかの空間を歩くのでも習練が必要なのである。

私は演出家であるが、いざ講演する時に舞台の袖から演壇まで歩く数歩あるいは十数歩がなかなか難しい。

このごろは図々しくなり、歩きながら聴衆を眺め「うん、女が多いな」などと、どこに話の中心を置くか、そんな目標も、この短い間に定めることができるようになったが、最初のころは、重心を保つこともやっとで、まるで大地震のように、上半身を左右にガタガタと揺らせながら歩を運んだものである。

いつだったか、女性から「先生の袖から登場していらっしやるところが、何ともすてきよ」といわれてヤニ下がったが、よくきくと「上半身がちっとも揺れないんですもの。まるで能役者みたい」といわれて冷汗をかいた。それはそういわれるわけで、慢性胃下垂を癒すために晒木綿を巻くといわれ、一反巻いたら、瘡せているのでヤクザよろしく胸の方まで来てしまい、まるでギブスにはまったようになってしまったからなのである。

能役者は晒木綿もギブスも着用していないが、小腰をかかめ擦足で歩いている。あれは、体の重心を出来るだけ低めているのであろう。日本の「道」や「術」と称するものは総て、体の重心を可能な限り低めることが肝要のようである。こうすると、安定を得られるからであろうが、人間の歩行にも、これが必要なのであろう。しかし、このごろのヤングたちは、いやに「足長小父さん」になってしまったので、いやでも重心は高いところに昇ってしまった。

いつだったか、NHKの地方局の局長に連れられて、その名物ストリップ・ショウを観たが、私の感想は、日本の昔の女の体型は「肥桶に手足」ということだった。

故・木村莊八画伯がこの問題について、図入りで詳細に論じているが、肥桶とはいっていない。西洋婦人や、このごろのヤング嬢のようにウエストラインが昔の女にはなく、ズンドウなのである。

これは米食が原因と思う。重い米飯を、ごつてりと詰め込んだ腸は、そこで醗酵しガスが充満する。私は全裸に近い女のストリップガールの腹を透視するような気分になると、そこには消化物が、こつてりと詰まっている図が浮かんできた。即ち肥桶説の生まれる所以である。この肥桶たるや大変な重量で、これを支えるには力学的に申しても、短足、肉太になるのは至って自然な道理である。そして、重心が低下して安定がよくなる代りに、足は挙がらないのである。

ヤングが長足になったのは軽量な食物を詰めるからで、これはラインダンスなどには最も適している代り、重心は上昇し、転倒しやすくなる。

外国で老人の死の原因に、階段からの転落というのが非常に多いのは、日本人には想像がつかねるが、今に西洋人なみになるのであろう。

舞台上の交通整理とは、この重心の扱いをマスターした連中と、まだマスターしていない連中とを適当に混り合わせて、舞台がドタドタした感じにならないようにすることである。流石、舞踊の心得のある人は習練があって、安心なものである。

*劇作家 Playwright and Stage Director

原稿受理 昭和53年10月14日